

## 2024年4月14日（日）「殉教者の叫び」

ヨハネの黙示録 6:9-11

9 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神の言葉のゆえに、また、自分たちが立てた証しのゆえに殺された人々の魂を、祭壇の下に見た。10 彼らは大声でこう叫んだ。「聖なるまことの主よ、あなたはいつまで裁きを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」11 すると、彼らの一人一人に白い衣が与えられ、それから、「あなたがたと同じように殺されようとしているきょうだいであり、同じ僕である者の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように」と告げられた。

### 【序論】

今日は、この世界に残されたままである「未解決の問題」について、聖書の真理に照らして考えてみましょう。私たちの人生にも、過去に解決できなかった残念や、誤解が解けないまま来てしまっている問題など、思い当たることがあるでしょう。また世界を見渡すと、冤罪によって何十年も劣悪な環境で投獄生活を強いられている人、人身売買の餌食となっている子どもたち、主権も誇りも奪われて強制収容所で働かされている民族など、拭われぬままの涙がどれだけあるか分かりません。今日の箇所には、殉教の死を遂げた人々の叫びが綴られています。彼らは死刑に価する罪を犯したのではなく、その信仰によって迫害を受けたのです。支配者の容赦なき理不尽な処遇によって苦しみ命を奪われた人々がいました。そのような現実を神はどうご覧になっているか、なぜそれを放置しておられるのかと問うているのです。

### 【本論】

6章ではここまで、災いのイメージカラーを持つ馬とそれに乗る騎士が繰り返し登場してきました。しかし、ここでは災害にまつわるテーマは一旦息を潜め、殉教者の魂の問題へと話題が移行しています。

#### 本論 1. 神のことばとイエスの証のゆえに

小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神の言葉のゆえに、また、自分たちが立てた証しのゆえに殺された人々の魂を、祭壇の下に見た。(6:9)

ヨハネが本書を書き記していた時代、ローマ皇帝ドミティアヌスによるキリスト教徒の大迫害がありました。また、それ以前には皇帝ネロによってローマの大火の責任がキリスト教徒になすりつけられたこともあった。囚人はコロシウムに送られ、飢えたライオンの餌食となり、それを見物する大衆がいました。人類は数多くのおぞましい拷問器具を開発し、それ

によって無理やり自白へと追い込まれ者もあり、無実の罪を着せられて命を絶たれた者もいます。遠藤周作の『沈黙』などを読むと、この日本でも過酷な拷問が行なわれていたことが分かります。様々な時代に、神のことばとイエスのあかしのゆえに殉教した人々がいて、ここではそれらの人々の魂が集まっているのでしょう。

「祭壇の下」とありますが、祭壇とは犠牲の動物の血が注がれる所でありますから、殉教者の流された血が「犠牲の血」としての役割を果たしているようです。その「犠牲」は神に受け入れられ、天において最も神に近い場所に居て、神の心を和らげている。地上では凄惨な死を遂げた人々でありますが、天で受ける祝福はどんなに大きいことか。しかし、その魂も天での安らぎを受けながら、尚も未解決な事柄への訴えを叫ぶのです。

## 本論 2. 殉教者の叫び

**彼らは大声でこう叫んだ。「聖なるまことの主よ、あなたはいつまで裁きを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさないのですか。」(6:10)**

彼らの訴えは、悪事を働いた者への裁きが先延ばしにされていることへのフラストレーションが込められ、神の御名が踏み躪られたことに対する耐え難い思いで満ちています。キリスト者への迫害は各時代に形を変えて行なわれ、殉教者の魂の群れにまた新たなメンバーが加えられていく。このようなことがいつまで続くのか。

私たちにとって理解できないことは、キリスト者への迫害のみに留まるものではありません。ある国で既に行なわれているように、徹底した人民の統制により、人間がスコアで管理される時代が到来しつつあります。何億台もの監視カメラにより、どこで誰が何をしているかが政府には筒抜けであり、言論の自由は奪われ、スコアの低い人は職を失い路上生活を余儀なくされる。デジタル化が進むことは、世界中でこのような管理システムが導入されていくことを意味します。言論の統制とキャッシュレス化は、信教の自由の剥奪と宗教弾圧とも直結している。これからの時代は、そのような意味における新たな迫害が始まっていくでしょう。殉教者の叫びは更に大きくなっていくに違いありません。

## 本論 3. 神の返答

**すると、彼らの一人一人に白い衣が与えられ、それから、「あなたがたと同じように殺されようとしているきょうだいであり、同じ僕である者の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように」と告げられた。(6:11)**

殉教者の叫びに対する神の返答は、まず「一人一人に白い衣が与えられ」ということです。「白い衣」は複合的な意味を持ちます。「聖さ」「キリストの義」「勝利」「祝福」「天の国籍」…等。殉教者はこの時点では肉体を持たず、魂だけの状態にあります。彼らに白い衣が与えられたということは、やがてそれを着るための栄光のからだを与えられるという約束、彼らの死が決して忘れられていないことのしるしです。

殉教者の叫びへの答えの第二は、殉教者の数が満ちるまで待てということ。理解しにくいことですが、神の中では最後の審判に至るために必要な殉教者の数が定められているようなのです。ご自分の民を迫害する者への神の怒りが最高潮に達する時と言ってもよいかもしれません。神の怒りと審きの恐ろしさは、その時になって多くの人々に知られることになるでしょう。ここには一つのメッセージが込められている。弱者を虐げる者への警告であり、現在慈悲なく悪しき活動を繰り返している者が最終的にどんなに恐ろしい永遠の審きを味わうことになるかが暗示されているのです。神の沈黙が破られる時が来る。その日に先立ち悔い改める者はどれほど現れるのでしょうか。

殉教者の叫びに対する第三の答えは、「もうしばらくの間、休んでいるように」ということです。神の祭壇の下という安らぎの場所に移された彼らが尚も心を乱すことがないようにと、慰めのことばが投げかけられています。私たちも、世界で起きている悲惨を見聞きするとき、どんなに心が乱されることでしょうか。しかし、知らないでいるという罪もあるならば、現実をしかと見つめる必要があります。そして、自分にできることを一つでも行動に移していきたい。地上にあっては、苦しみを見る苦しみと、とりなしの祈りと、魂の安らぎといったものが渾然一体となっています。あらゆる苦しみから解放される日を待ち望みながら、地上の生涯を立派に歩み抜いていきたい。

#### 【結論】

キリスト者には如何なる状況下にあっても失われることのない心の平安があります。これは誰にも取り去ることのできない神との関係であって、私たちにも与えられている「白い衣」、すなわち主イエスご自身であります。この慰め主が聖霊によって私たちの内に住んでくださっている。私たちの人生には多くの試練が伴いますが、一つひとつそれらを乗り越える力を与えてくださる方が共におられます。主イエスに信頼し、神の義が最終的に全うされることを信じて歩んでまいりましょう。

#### 【祈り】

この世界で起きているすべてのことを知り給う、天の父なる神様。私たちが見ているものはほんの一部であり、人知れず流されている多くの涙があることを知ります。イエス・キリストの証のために命を失った先人たちの魂を覚えます。また、まさにこの時、何らかの迫害の下で苦しんでいる人々が救われるよう祈ります。願わくは平安な一生を歩み抜きたい私たちですが、世の終わりが近づくほど闇は深まるとも言われています。如何なる時代にあっても、与えられた一日一日を大切に生きることができるよう。そして、共にまし給う主イエスに支えられながら、地上にある使命を全うしていくことができるよう、常に助けていてください。一人びとりの魂を平安で満たしてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
すべてのことに時を定め、聖き御旨を成し遂げ給う、父なる神の愛、  
殉教者を覆う「白い衣」そのものとなり、今もご自身を信じる者と共にます、主イエス・キ  
リストの恵み、  
如何なる時代にあってもご自身の民を守り、その心に全き平安を与え給う、聖霊の親しき交  
わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。